

地域観光資源の発信と英語教育の接点 －「“禊”体験を世界へ!!!」活動実践を通して－

Effects of Community Tourism Resources Utilization and English Education:
An Activity Report of Supporting *MISOGI* Experience

中 谷 博 美^{*1}、葦 名 理 恵^{*2}

要旨

本稿では、地域資源を発信する活動実践をまとめ、英語教育に活用することで見えてきた課題を言語と文化の観点から分析し、共通語としての英語（ELF）と英語教育のあり方について考察する。教育的効果を得るには、学習者と指導者がともに文化による言語の違いに気づき、それを深い学びにつなげようとする態度、またELFの認識を高め、多様な英語あるいは日本語に寛容な態度を育成することが必要であると提案する。

キーワード：英語教育（English education）／地域観光（community tourism）

I はじめに

近年、教育やビジネスに加え、観光分野においても英語の運用能力が最重要課題であるとの認識が高まっている。観光庁の調査結果では、外国人観光客が旅行中困ったことは「施設等のスタッフとのコミュニケーション」であるとの回答が最も多い（国土交通省観光庁 2017）。日本人の英語に関する不満があることはその他の調査項目からも確かではあるが、コミュニケーションにおいて重要となるのは、英語による意思疎通かどうかは疑問が残る。訪日外国人の国籍は、韓国（24.2%）、台湾（19.2%）、中国（15.0%）とアジアの国々が過半数以上を占めており、英語圏である米国（12.5%）、カナダ（5.0%）、英国（3.3%）、オーストラリア（2.5%）は23.3%と全体の4分の1に満たない（同上 2017）。また、英語だけでなく日本語で話しかけられた経験も少なくないことから、外国人観光客の日本語運用能力が変化しつつ

あると考えられる。

このような現状を踏まえ、本稿は、地域資源を発信する活動と英語教育の接点から見えてきた課題を言語と文化の観点から再考し、共通語としての英語と英語教育のあり方について提案することを目的とする。本稿では、大学コンソーシアム石川¹の支援を受け2018年度より実施している、北陸学院大学短期大学2年生有志5名と白山市観光連盟²との連携事業による外国人誘客プロジェクト「“禊”体験を世界へ!!!」における実践を基に論じる。

II 地域観光の現状と課題

石川県において、平成29年の外国人観光客（宿泊数）は、前年度比で114.5%、平成28年は145%に達しており、平成25年以来、北陸新幹線の開通等の影響により、毎年増加傾向にある（石川県観光戦略推進部 2017, 2018）。石川県におけるこの傾向は、主として金沢市中心部に顕著なものであり、金沢市の南に位置する白山市においては、いまだ大きな変動は見られない。石川県は能登地方と加賀地方に大きく分けられるが、金沢市と白山市はともに加賀地方にある。金沢市は人口も多く

^{*1} NAKATANI, Hiromi

滋賀県立大学 人間文化学部 国際コミュニケーション学科
英語科教育法Ⅰ・Ⅱ、English in Media

^{*2} ASHINA, Rie

北陸学院大学 短期大学部 コミュニティ文化学科
Hospitality English、Kanazawa Guide

歴史と伝統文化の町として栄え、兼六園、21世紀美術館、ひがし茶屋街、近江町市場など観光資源が豊富であり、国内外で人気のある観光地であると言える。また、主要な拠点である金沢駅は利便性が高い。一方、白山市は白山白川郷ホワイトロードや白山比咩神社など集客の可能性のある観光資源を有するものの、金沢駅や小松空港からの交通アクセスが整っていないこと、案内やPRが不十分であることなどの理由から、外国人の誘客の準備ができていないと言えない状況にある。

このような現状の中、白山市観光連盟は昨年度、白山開山1300年を機に、白山比咩神社が主催する個人客向けの月2回の「禊体験」を外国人向けの体験へ展開することを決定した。神社の境内に禊場を持ち禊体験ができるのは国内でもめずらしく、白山比咩神社は一般の観光客が実際に禊を体験できる貴重な場所である。外国人観光客にとっては、日本の伝統文化を直に経験できる魅力ある企画となっており、旅行会社の関係者からも注目されている。今年度、学生がサポートし、この禊体験を世界中にPRしていこうとする活動を立ち上げた。

Ⅲ 外国人誘客プロジェクト「“禊”体験を世界へ!!!」

北陸学院大学短期大学部の有志5名は、授業やゼミでの異文化コミュニケーションについての学びをきっかけに、白山市観光連盟と連携して「チームMISOGI」を結成、プロジェクト「“禊”体験を世界へ!!!」を企画し、大学コンソーシアム石川の「学生による海外誘客チャレンジ事業³⁾」の支援を得て活動している。地方における外国人観光客誘致の諸問題を解消し、日本古来の文化を英語で分かりやすく発信する方法を学び、地元の文化を世界にPRすることが活動の目的である。

活動の中心となる白山比咩神社は、石川県の白山市(旧鶴来町)にあり、すぐそばには手取川が流れている。今から2100年前に創建されたこの神社は、日本三霊山の一つである白山を祀っており、全国に約3000社ある白山神社の本宮である。ここでは、人々の生活にとって大切な「水」を信仰している。禊体験では、昇殿参拝の後、神社と禊についての座学と禊歌や祓詞など禊行事の言葉と動作の練習を室内で行い、白山の伏流水が満ちる白山比咩神社の禊場に男性はふんどし、女性は白着

物に着替えて入り、神職の指導のもとに「水」への感謝を捧げ、穢れを洗い心身を清める。

2017年度は、外国人体験者は5名程度であるが、何度も熱心に通う地元の留学生もいた。しかし、この体験自体の認知度が低く、プロジェクトの当該学生5名も石川県内出身であるにもかかわらず(金沢市3名、小松市1名、羽咋市1名)、この体験について知らなかった。体験の内容は、日本人にとっても表現することが難しく、正しく口頭で伝えることはなかなかできない。また、問題点として、観光の拠点となる金沢市からのアクセスが分かりにくいことがあげられる。そこで、禊体験をまず知ってもらうために外国人を対象とした金沢駅発着のモニターツアーを実施することを今年度の最終目標として活動をスタートさせた。

今年度、実際に行った具体的な活動内容は次の3点である。①外国人留学生と協力し禊体験をどのように改善し、発信すれば誘客数を伸ばせるかを調査、検証する。②先行事例として明治神宮を視察し、外国人への対応を学ぶ。③外国人を対象としたモニターツアーを企画・実施し、PR活動を行う。これらの活動を通して、学生が自文化の価値を再認識し、国際的視野に立って発信できる力を身につけ、これからの地域活性化に貢献していくことを目指した。

Ⅳ 英語教育と活動の教育的効果

日本の(特に高等教育以降の)英語教育における大きな問題点の一つとして、学習した英語運用能力を活かす実践の場が非常に少ないことがあげられる。なぜなら中高の英語教育の実態として、生徒や保護者の本音の目標は入試であり、英語教育は入試のためにはうまく機能している(松本1994)からである。教師の願いとして、英語を使って人とつながることのすばらしさや喜びを自ら体験してほしいとの思いはあるが、調査で「生徒が英語を使う言語活動を十分に行っている」と答えた高校の教師は全体の19.0%、「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を十分に作っている」と答えたのはわずか9.9%にすぎない(根岸ほか2016)。授業では入試対応に追われ、高校では英語を使う経験の場は少ないと言える。

文部科学省の提案する2020年の大学入試改革に

より、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能がテストされる(文部科学省 2017) こととなり、高等学校における授業に変化が生じる可能性はある。しかしながら、依然として入試のための授業が主に行われる可能性も多々あり、生徒や保護者からは、例えば実用英語検定やTOEIC®といった試験のための授業が期待されていることも事実であろう。現状よりは実践的な「話す」「書く」活動がより活発に授業で行われると考えられるが、大学における教育で英語を使うイメージにつながるものが不可欠である。

本稿におけるプロジェクトの実践は、教師の願いとしての「英語を使う体験」により近い、英語学習の成果としての発信と異文化コミュニケーションの実践経験、さらに異文化コミュニケーションを通して自文化へのより深い学びが大学でできる可能性があることを示している。こういった活動が大学で実施されていることを知れば、学生や社会人が英語を使うイメージがより明確になる。また、地域活性化のために働く自治体との協働により地元への理解を深め、課題意識を持つことにより、主体的な学びができる。

活動チームを立ち上げた学生5名は、英語学または異文化の研究を行うゼミに所属しており、コミュニケーションに対する興味関心は比較的高い。英語学習に対しては、必ずしも高い意欲があるわけではなく、英語に関する授業を多数受講している学生とそうではない学生が混在している。当該学部コミュニティ文化学科⁴では、英語と観光に関して表1のような授業が受講可能である。

表1 英語と観光に関する授業

授業名	内容
金沢学	金沢の文化と観光について日本語で学ぶ
異文化コミュニケーション論	言語と文化、海外留学、海外での仕事等について学ぶ
Kanazawa Guide	金沢を英語でガイドするための実践的講座
Advanced English I～III	ネイティブまたは日本人講師による中級英語
Hospitality English	観光英語とホスピタリティを学習する講座

5名の学生はそれぞれ、これらの授業のうちのいずれか(2～3つ程度)を受講済み、または受講している状況である。したがって、十分な段階にあるとは言えないが、先に述べた教育的効果が期待される。

V 活動実践内容

ここでは、今年度行った3つの活動(視察の調査・検証、先行事例として明治神宮の視察、モニターツアーの企画・実施)について、詳しく述べる。

i) 視察の調査・検証

活動の出発点として、視察の現状と問題点を把握した。具体的な改善点を見つけるため、体験をした留学生や外国人観光客などにインタビューを行うとともに、実際に学生が視察に参加した。調査内容とその結果の検証を以下に示す。

①白山市観光連盟とのミーティング

(2018年6月15日：白山市観光連盟事務所)

昨年度の状況、体験における現状などを白山市観光連盟で聞き取りを行った。交通アクセスに関する問題、認知度の低さなどの課題について検討することが決定した。

②学生による視察

(2018年7月22日：白山比咩神社)

一般の参加者とともに学生の一人が視察を行った。体験した学生とその様子を記録した学生により、検討課題を具体的にした。神職の方からの説明の30分がすべて日本語で行われている点、視察の言葉が日本語でも難しい点が改善すべきである。

③留学生(ドイツ)とのミーティング

(2018年8月1日：金沢大学)

日本文化を学ぶために留学する大学生が、複数回体験を行っているとの情報を得て、白山市観光連盟の協力によりミーティングを行い、活動への協力を依頼し、承諾を得た。

④外国人(4人)へのインタビュー

(2018年8月4日：白山市観光連盟事務所)

なぜ視察に興味を持ったのか、外国人へのPRの仕方、改善してほしいところを聞いた。(英語

でのやり取りは主に教師、聞き取りは学生による。)外国人にとって体験の魅力は、日本の伝統文化であること、昇殿参拝などである。神道らしさをアピールすることが問題の改善につながるとわかった。日本人、外国人に関わらず、全体の流れや注意事項などについて、事前に知らせてもらえないこと、英語資料がないことが不十分な点であると知った。禊行事の説明や注意事項などについては、白山市観光連盟が対応し、英語資料と説明の英語訳については学生が担当することが決定した。

調査の結果から、交通アクセス、体験のわかりやすさ、英語対応の3点が大きな課題であることがわかった。2018年9月に白山市観光連盟とこれらの課題の解決策を検討した。その結果、金沢駅からの学生による案内と英語資料を加えた外国人向けのモニターツアーを2018年11月17日に実施することを決定した。モニターツアーを実施するにあたり、先行事例から学ぶために、明治神宮視察とモニターツアーの企画を立て、詳細を検討した。視察では、英語によるガイドを担当している神職の方に話を聞く機会を得た。

ii) 先行事例の視察

2018年10月26日に先行事例である明治神宮を視察に行き、学生が英語でツアーガイドを補佐できるように、対応の仕方や必要なノウハウを学んだ。



図1 明治神宮視察の様子

明治神宮は、東京の大規模な神社であり、訪れる観光客の半数は外国人だという。実際に、視察の日は平日であったが、かなりの割合で外国人観

光客が訪れていた。まずは、神社の説明を受け、次に禊や神道について質疑応答の時間をもらった。その後、明治神宮の禊を体験し、最後に英語で案内をしてもらった。後日、英語については、翻訳を担当する学生が書き起こし、接続詞の使い方や簡単に説明する技術など英語資料の参考にした。

マナーに違和感を感じたときには、まず挨拶してから話をする(注意をするという態度は押し付けになる)、神道は他の宗教とは異なるので、神社は信仰の違いを超えて訪れることができる、など具体的な注意事項は、学生にとって有益であった。

iii) モニターツアーの企画と実施

2018年10月にモニターツアー準備のため、英語で3つの資料(①チラシ、②地域マップ+ガイド用のファイル、③神社と禊の解説プリント)を作成した。

①チラシ(資料1)

英語でモニターツアーの日時、内容、応募先および申し込み方法など必要事項を伝えるもので、インターネット上でレイアウトを作成し、業者に発注して1000部用意した。県内の案内所やホテルやゲストハウスなどの宿泊施設、近隣大学など約20か所に置かせてもらうとともに白山市観光情報サイト「うらら白山人」やFacebookで情報をアップするなどして、外国人のモニターを募集した。チラシを見て申し込みをしたモニターは2名にとどまったが、認知度を上げる効果もあったと考える。

②地域マップ(資料2)+ガイド用ファイル

最寄り駅である鶴来駅から白山比咩神社までの道順と観光案内を兼ねたマップを作成し、マップで取り上げた施設の写真をファイルにまとめ、ガイドの際に活用できる形にした。地域マップは、両面で3つ折りの形で作成し、マップの裏面には通り道の観光情報を英語で載せた。鶴来駅周辺の観光スポットについて、ツアーの下見を実施して行程を確認し、13か所について取り上げた。

③神社と禊の解説プリント(資料3)

禊体験では、昇殿参拝の後、神職の方から白山比咩神社と禊行法についての講義を受ける。モニターツアーでは、その講義内容の動画を聞き取り、

英語のプリントにまとめた。前半の神社の歴史や禊についての説明を学生が担当した。後半の禊行事の解説部分については、白山市観光連盟の方が担当した。この動画については、学生による英語字幕を作成することを最終目標としており、現在取り組んでいるところである。

これらの資料のほか、最低限必要な英会話表現 (May I have your name?, Please follow me. など) のリスト、モニターへのアンケートなどを準備した。



図2 モニターツアーの様子

応募してきたモニターは7名となった。事前に当日の流れや持ち物など調査で不十分であった注意事項などについて、白山市観光連盟の方を通じて、メールでやりとりした。7名の出身地はそれぞれ、オーストラリア2名、中国2名、アメリカ1名、ベトナム1名、日本1名(英語教員)である。職業は、ALT、教員、留学生5名であった。留学生については、高校生2名と大学生3名である。

モニターツアーは、2018年11月17日に金沢駅発着で鶴来駅周辺と白山比咩神社の案内を地元ガイ



図3 モニターツアー参加者と学生たち

ドと日本人学生により行った。学生は、金沢駅から鶴来駅までの電車移動についてモニター7名を案内し、鶴来駅から白山比咩神社までの徒歩移動については地元ガイドの補助を英語で行った。神社での案内については、白山市観光連盟の通訳ガイドが担当し、学生は神社内の移動や資料・アンケートの配布などモニターのサポートを担当した。

英語でのコミュニケーションはごちなかったが、鶴来駅からの徒歩移動の途中で、観光スポットのひとつである休憩所で昼食をとったときに、日本語でもコミュニケーションが取れることを知り、徐々に会話ができるようになっていった。ツアーの最後には、写真を撮ったり、連絡先を交換するなど、学生らしい交流ができていた。ツアーの様子は、当日と翌日の新聞に掲載されており、禊体験の認知度を向上する点では、大きく貢献できたと思われる。

モニターへのアンケートでは、iで述べた改善点(交通アクセス、体験のわかりやすさ)について検証した。英語については、今回はほとんど必要とされていなかったため、検証していない。次頁の表2は、アンケートのまとめである。全体的に満足度は高く、好意的に評価していることが分かる。特に、金沢駅から白山比咩神社への道案内については、満足している様子がうかがえる。体験内容についての説明は、やや不十分だったと考えられ、さらなる改善が必要である。

今年度行った活動により、次のような成果が得られた。交通アクセスに関しては、学生が金沢駅からガイドすることにより解消できる可能性がある。体験のわかりやすさについては、メールでの事前説明やプリント、当日のサポートを行ったが、さらに工夫し改善する必要がある。この点に関しては、モニターツアー後に作成した英語字幕入りの動画により改善される可能性がある。英語対応については、必要とされない場合があり、日本語で簡単に説明できることがより先決であると思われる。また、チラシの配布や新聞記事の掲載により、禊体験および活動が広く認知された点も成果のひとつと考えられる。

次セクションでは、活動実践について言語と教育の観点から考察する。

表2 モニターツアー参加者のアンケートのまとめ

	Question	Yes	No
1	Was the guide from the station to shrine convenient?	6	1
2	Are you interested in the cityscape or any sightseeing spots in Tsurugi?	6	1
3	Were you able to understand the great purification?	5	2
4	Was it easy for you to understand the explanation of the purification ceremony?	5	2
5	<p>Please write your opinions about transportation below.</p> <p>→Good, but going on my own would've been difficult and lonely.</p> <p>It was very nice. たのしかった。</p> <p>The scenery from the local train was beautiful.</p> <p>よかった。</p> <p>近い。道案内が詳しかったです。</p> <p>とてもいい体験だと思います。今度もし機会があればまた行きたいです。</p>		
6	<p>Do you have any ideas to improve this tour?</p> <p>→More explanation as to the purpose.</p> <p>Longer Kimonos</p> <p>I need to know the history of Hakusan and something like that before I join this kind of tour.</p> <p>とくにな、完璧でした。</p>		
7	<p>What were your expressions of the MISOGI experience?</p> <p>→Okay. Scattered but OK.</p> <p>It was a rare experience for me.</p> <p>Cold and embarrassed.</p> <p>It was very interesting and I could learn much about Japanese culture.</p> <p>さむいけど、とてもおもしろいです。</p> <p>身体から魂まできれいにする活動だと思います。</p>		

VI 地域資源を発信する活動と英語教育の接点

ここでは、活動している学生の感想から、教育的効果が得られたかどうかを検証し、再考すべき言語観と英語教育に関して述べる。

活動に対する学生の感想の一部を抜粋して以下に示す。

①学生Aの感想

今回の活動を得て、自分自身全く興味のなかったことに目を向け、また、学ぶことが出来た。明治神宮視察では、普段から外国人に観光案内をしている方に実際に明治神宮内を説明していただいた。そこで、外国人観光客に説明するに当たっての注意点、襖について、そして神様の話を聞いた。自分の知らなかったことを沢山知り、以前よりうまく英訳できるようになった。まだまだ足りない部分は多いが、これからこの活動のことを活かして、多くの外国人に日本の文化を知ってもらえるといいと思う。

②学生Bの感想

ガイドさんの日本語を英語で何というのか、など突然の英語の質問に対応するのが難しかった。英語でもとっさに応えられるようにしたい。外国人はフレンドリーな人が多く、英単語を覚えるなどして、コミュニケーション力を上げてもっと話したいという気持ちになった。一般の観光客と違い、日本語の方が通じたことに驚いた。日本語で簡単に説明することができれば、英語でも伝えられると思った。襖体験は、日本人でも普段はできない体験なので、活動に参加できてよかったと思う。

③学生Cの感想

中国からの留学生の女子2人は、東京や大阪のような定番の日本の観光地ではなく、カフェなどのちょっと外れた場所のかわいいものが好きで金沢に留学していると聞いた。ツアーで鶴来市内を案内しているときに、歩きながら自前のカメラでたくさん写真を撮っているのが印象的だった。外国人の目から見る地元のいいところを知ることができてよかった。また、英語ではコミュニケーションできなかったが、ALTの先生と「きもかわいい」という言葉について話しをした。

Ⅲで述べた教育的効果は、英語学習の成果としての発信と異文化コミュニケーションの実践経験、さらに異文化コミュニケーションを通して自文化へのより深い学びの3点であった。上記の学生3人は、英語学習に関心の高い学生である。英語での発信については、学生AやBからは達成感が感じられるが、学生Cは英語で発信できたと感じられていないようである。学生Bの感想にあるように、モニターツアーで英語よりも日本語対応を求められたことも要因の一つだと考えられる。異文化コミュニケーションに関しては、学生Aの感想からは読み取ることができない。ほかにも、コミュニケーションに消極的になった学生もいたと思われる。しかし、自文化への深い学びに関しては、どの学生の感想からも読み取ることができる。地域観光資源の発信は自文化への学びに確実につながると言える。

英語での発信と異文化コミュニケーション体験を十分に得られなかったことに対しては、個人差があるにせよ、課題としてあげられる。これらの効果が比較的高く見受けられた学生は、表1で示した授業のうち、特に英語に関する授業を継続して受講している。学習の継続の他に、言語と文化、共通語としての英語という2つの観点からこの問題について考察する。

i) 言語と文化

英語での発信に関して、学生が消極的になる理由の一つとして、日本語や日本文化を正しく伝える難しさがあげられる。V-iiで示した明治神宮の視察において、その解決策の一部を示されることで、学生の言語や文化への態度に変化が生じた。英語訳をした学生Aは、言語と文化に関してレポートで次のように書いている。

…日本には“God”のような絶対主という概念は存在しないので、神の訳語には“God”ではなく“Kami”とあてていると聞いた。もちろん“Kami”とは何か、という説明も加えなければならないが、正しい信仰を伝えるためのことである。絶対主という概念をまったく持たない日本人は、このことを理解し注意して訳さなければならない。

英語の“God”がキリスト教的絶対者を指すのに比べて、日本の神は捉えにくい。日本語の「神」を普段発話する状況を考えてみると、「神がかりだ」「神ってる」「神！」など、「神様」以外は名詞として使用していない例が多いことに気が付く。日本の「神」について、河合隼雄は著書『神話の心理学』において「神々の姿は人間の内的体験をあらわす」と言及している。英語の“God”がひとつの対象を示すのに対して、日本語の「神」は、人間の内的体験を表し、対象が存在しない。英語は外からの視点で物事を捉え、日本語は、事態を内側から（主観的に）捉える傾向がある（池上2006、中村2009など）と言われるが、“God”と「神」はまさにその捉え方の違いを示している。

学生の気づきを活かし、いま述べたような言語の側面を伝える機会を持つべきであると考えられる。授業でも日英の捉え方の違いについては、学生の反応から興味関心の高いところであった。文化による言語の違いを実感し、解決策を得ることができれば、実践を継続する動機となり、さらなる調査研究につながる。

ii) 共通語としての英語と英語教育

異文化コミュニケーションに関しては、英語運用能力を身に付けることが、グローバル人材となるための条件ではなく、むしろ異文化への興味関心や寛容な態度がより肝要である。高等教育機関においては、共通語としての英語（English as a lingua franca⁵、以下ELFと言及）の認識を学生も教員も高めるべきである（村田ほか2018）との立場をとりたい。冒頭に示したように、アジアの観光客が全体の過半数を占めている中、観光の現場においても求められているのは、ELFによるコミュニケーションであり、ネイティブと同様の英語を期待しているわけではないことが実践からも示される。音声や文法において変化がみられるような多様な英語、あるいは日本においては多様な日本語に対応していくことも寛容な態度のひとつである。

モニターツアーに参加した外国人は、日本文化により深い興味を持つ日本在住の外国人であったため、日本語の能力が想像以上に高かった。英語より日本語での対応を求められ、神職の方の説明

や禊行事の解説の言葉など、日本語そのものに対しても強い関心があった。外国人に対する固定観念的イメージ（日本語が話せない、流暢な英語でのみコミュニケーションする等）を持ち続けていることは、学生にとって異文化間交流を妨げになる。近年では、日本を訪れる外国人や留学生が日本語を習得しているケースも多く、英語に堪能であることが異文化間交流の必須条件ではない。むしろボランティアとして留学生に接する際には、日本語を使うようにと指示されたとの声も聞く。こうした流れの中で、英語学習の必要性を強く訴えることが、逆に異文化間交流に負荷を与えているという状態に陥らないように注意しなければならない。

コミュニケーションに用いられるのはELFであると認識できれば、間違いに対する恐怖感や流暢さ不足に対する羞恥心なども薄れていくと考えられる。学生は、実践的活動を続けていくことで、「英語でコミュニケーションが取れなかった」というフラストレーション体験を必然的に持つ。それがむしろ英語学習を継続する動機づけとなることが期待される。

Ⅶ おわりに

本稿では、地域資源を発信する活動実践をまとめ、英語教育の接点から見えてきた課題を言語と文化の観点から考察し、共通語としての英語と英語教育のあり方について検討した。活動実践の教育的効果として、地域観光資源の発信による自文化への学びがすべての学生において見られた。英語による発信と異文化コミュニケーションの体験に関しては、個人差があるものの、一定の成果が見られた。活動実践を通じてより高い効果を得ていくには、文化による言語の違いに気づき、それに対応できるようになること、ELFの認識を高め、多様な英語あるいは日本語に寛容な態度であることが必要であると提案した。本稿のような授業外の実践を通して、学生だけでなく教員もまた学びを深め、英語運用能力の向上以外にも自己研鑽し、高等教育機関における英語学習の意義と可能性を追求していくことが望ましいと考える。

謝辞

本稿の外国人誘客プロジェクト「“禊”体験を世界へ!!!」実施にあたり、連携先としてご支援いただいた白山市観光連盟 舟津能子さま、金沢大学大学院生 Thomas Ladurnerさま、ご協力いただいた石川県企画振興部企画課 高等教育振興・国際機関連携グループ主事 小倉優太さま、明治神宮 国際神道文化研究所 国際事業課長 伊藤守康さま、国際事業課 藤井志帆さま、白山比咩神社のみなさまに心より感謝申し上げます。

また、本稿におけるプロジェクト、チーム MISOGIの「“禊”体験を世界へ!!!」は、大学コンソーシアム石川の「学生による海外誘客チャレンジ事業」に採択され、助成を得て活動しているものです。

〈注〉

- 1 大学コンソーシアム石川は、石川県内の全ての高等教育機関（大学、短期大学、高等専門学校）が連携して、教育交流・情報発信・地域連携等を行い、高等教育の充実・発展及び地域社会の学術・文化・産業の発展に寄与することを目的として、平成18年4月1日に設立されたものである。
- 2 白山市観光連盟は、白山市役所鶴来支所1階に事務所と窓口を置く、白山比咩神社をはじめ市内全域の観光・イベント情報を提供する団体である。
- 3 学生による海外誘客チャレンジ事業とは、県内高等教育機関に在籍する学生のアイデアや自由な発想を活かした、石川県を訪れる外国人を増やすことを目指した活動（以下、「海外誘客活動」という。）を支援することである。チームMISOGIの「“禊”体験を世界へ!!!」は、採択されて助成金を得ている海外誘客活動10件のうちのひとつである。
- 4 北陸学院大学短期大学部コミュニティ文化学科では、外国語・異文化理解コースが設置され、言語を学ぶ授業のほかに異文化理解に必要な知識や技術を高める授業を開講している。
- 5 ‘English as a lingua franca’ (ELF) has emerged as a way of referring to communication in English between speakers with different first languages (Seidlhofer 2005).

資料

1 モニターツアーちらし

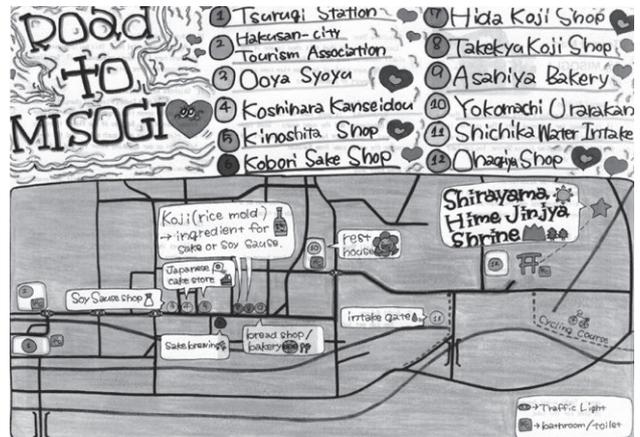
禊 MISOGI Experience
At Shirayama Hime Jinjya Shrine

Time Table
12:00 Meet at Kanazawa station (Information center).
14:10 The local guide will take you from the Ohagiya shop.
14:30 Pray at the shrine sanctum.
15:00 Classroom learning and instruction on the Misogi ritual.
15:45 Misogi ritual experience.
16:30 Receive certificate of completion.
16:40 Fill out the questionnaire.
17:00 End of the tour.
18:00 Kanazawa station

E-mail to Hakusan City Kanko Renmei (白山市観光連盟)
※Please send us a message with your name, country, age and e-mail address!!
hakusan@urara-hakusanbitto.com
TEL:076-259-5893 (10:00~16:00 only on Mon, Wed and Fri)
Get more information about "Shirayama Hime Jinjya Shrine" <http://www.shirayama.or.jp/en/index.html>

2 地域マップ

(表面)



(裏面、一部抜粋)

Tourist Map for MISOGI

1. Tsurugi Station
Tsurugi Station has a retro Showa style so that it is famous for railroad buff. The station is crowded with a lot of people for New Year's first visit to Shirayama Hime Jinjya Shrine. You can take a bus to the shrine in two minutes.

2. Hakusan-city Tourism Association
You can get information about Hakusan-city there. The staff will recommend you the sightseeing spot or local food both in English and Japanese.

3. Ooya Shoyu Shop
Ooya shoyu has made soy souse with professional skills for 140 years. The soy souse is really popular because clear natural water and miso made in Hakusan is used for the soy souse. You must try it with Japanese food!

4. Koshihara Kanseido
A Japanese cake store in Hakusan. The three major Japanese cakes are:
★ "Sake Castella (sponge cake) ... Soft and moist sponge cake including Kuku (chrysanthemum) Sake.
★ "Wasabi rice cake" ... Sweet rice cake but smells Japanese horseradish and tastes great!
★ "Tochi rice cake" ... This cake tastes soft and sweet. Tochi means Japanese horse-chestnut and is used for the cake.

3 神社と禊の解説プリント

(表面)

Shirayama Hime Jinjya Shrine and Misogi Experience Guide

I will tell you Hakusan and Shirayama Hime Jinjya Shrine's history.Mt. Hakusan's precious water sources provided an indispensable key to life.People believe that Kami of every creature is in Hakusan for a long time. And we have worshiped the Kami (nature itself) in this shrine.



Shirayama Hime Jinja Shrine was established here over 2,100 years ago. We have 3000 shrines in Japan and the main shrine is this Hime Jinjya.This shrine's Kami of Shirayama Hime Okami is called Kukuri-Hime.Kukuri-Hime is a female Kami and her name is Kukuri-Hime no Mikoto.

You can see her story in Nihon Syoki (Japanese old myth). She made up a quarrel of Izanagi no Mikoto and Izanami no Mikoto. Then Izanagi went to the river and cleaned his body and mind, do Misogi. That's why Shirayama Hime Jinja Shrine is also dedicated to Izanagi no Mikoto and Izanami no Mikoto.

In Japanese, "kukuri" can also mean "to tie" or "to bind;" as a result, Kukuri-Hime no Kami is also revered as both the goddess of matchmaking and the goddess of marital conjugal bliss. In Japanese, "kukuri" can also mean "to tie" or "to bind" as a result, Kukuri-Hime no Kami is also revered as both the goddess of matchmaking and the goddess of marital bliss.

(裏面)

When we say "MISOGI", it means cleaning up your body and mind by yourself in Shinto. It's different from "taki-gyo(water fall training)" at temples. You know, many temples and shrines held this kind of training, but on the side of Japanese sea you can experience Misogi only at Hakusan. In nature, we do these training at a river or sea, but we have Misogi place here.

We believe that melted snow water from Hakusan gives us a lot and we realize this when we do Misogi. I think that we live in nature and nature makes us live in the nature. It's important for us to know that water from Hakusan is our treasure. I hope you will appreciate nature and yourself through this experience.

It's said that mountains of white (Haku-san) are symbols of the place of Kami or God. So many other mountains in the world has "white" in their names like Mont Blanc or Mt. Kilimanjaro. People believe that some Kami live in Hakusan. I think that it's really precious time to do Misogi using water from Hakusan. So I hope you will enjoy today's experience.



〈参考文献〉

池上嘉彦. 2006. 『英語の感覚・日本語の感覚』NHK出版：東京.

Deutscher, G. 2010. Through the Language Glass. Allow Books : London.

(棕田直子訳 2012. 『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』インターシフト：東京.)

江口真理子. 2012. 「地域に根ざした英語教育」『総合政策論叢』第22号 pp85-95 島根県立大学 総合政策学会.

遠藤昌子. 「地域発信型の英語教育の可能性 英語オーラルガイド授業の実践報告」『札幌大学女子短期大学部紀要』第51号 pp 5-38.

河合隼雄. 2006. 『神話の心理学』大和書房：東京.

松本青也. 1994. 『日米文化の特質』研究社出版：東京.

村田久美子・小中原麻友・飯野公一・豊島昇. 2018. 「EMI (英語を媒介とする授業) とビジネス現場における「共通語としての英語」の意識調査、および英語教育への提言」教育総合研究所 紀要『早稲田教育評論』第32巻第1号 pp55-75.

中村芳久. 2009. 「認知モードの射程」坪本他編『「内」と「外」の言語学』開拓社：東京.

Seidlhofer, B. 2005. 'English as a Lingua Franca'. ELT Journal Volume59. Oxford : Oxford University Press.

〈参考資料〉

石川県観光戦略推進部. 2017. 「統計からみた石川県の観光平成28年」
http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kankou/documents/ishikawa_kankou_toukei2017.pdf
 (情報取得2019年1月10日)

石川県観光戦略推進部. 2018. 「統計からみた石川県の観光平成29年」
http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kankou/documents/ishikawa_kankou_toukei2017.pdf
 (情報取得2019年1月10日)

国土交通省観光庁. 2017. 「外国人旅行者に対するアンケート調査結果について」
http://www.mlit.go.jp/kankocho/news08_000233.html
 (情報取得2019年1月10日)

文部科学省. 2017. 高大接続改革「大学入学者選抜改革について」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1397731.htm

(情報取得2019年1月10日)

根岸雅史・酒井英樹・高木亜希子・重松靖・工藤洋路・
木村治生・加藤由美子・福本優美子. 2016. 「中高の
英語指導に関する実態調査2015」ベネッセホールデイ
ングス

<https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4776>

(情報取得2019年1月10日)

〈ウェブサイト〉

大学コンソーシアム石川

<https://www.ucon-i.jp/newsite/about-uci/index.html>

(最終閲覧2019年9月20日)

白山市観光情報「うらら白山人」

<http://www.urara-hakusanbito.com/guide/>

(最終閲覧2019年9月20日)

学生による海外誘客チャレンジ事業

<https://www.ucon-i.jp/newsite/jigyoyu/youkyaku.html>

(最終閲覧2019年9月20日)

